大学への学校適応感の予測因子
―自己概念と友人関係のあり方からの検討―[1)]

潮村公弘・冨岡　愛・船越理沙
（フェリス女学院大学）（とみおか内科クリニック）（フェリス女学院大学）

目的

近年、青少年の適応に関する問題として、不登校やいじめなどの問題行動が取り上げられるようになってきた。日本においては学校を楽しいと感じている小中学児童生徒の割合が他国よりも少ないことが示されており（ベネッセコーポレーション, 1997）、学校不適応の問題は不登校児童生徒以外にも共有されていることが明らかになっている（杉村・石井・張・渡部, 2007）。このように、青年の環境適応が問題視されており、大学不適応者の大学中退者が増加傾向にあることも指摘されている（旺文社教育情報センター, 2007）。また、近年では中学生や高校生を中心に見られた学校不適応状態が大学生にまで拡大していることが考えられ、社会生活への適応の問題への進展の可能性も指摘されている（山田, 2006）。

これまでの研究において、学校適応感は、主に「学業」「友人関係」「教師との関係」などの要因の集合体として測定されてきた（e.g., 小泉, 1995；内藤・浅川・高瀬・古川・小泉, 1987；鈴木・戸ヶ崎・坂野, 1998；戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野, 1995）。こうした従来の学校への適応感研究は、個人が学校生活において問題をどこに抱えているかが明確となるため、援助を目的とした場合は有益であると考えられてきた。しかしながら、従来の適応感研究における学校への適応感や不適応感の測定では、あらかじめ学校生活に求める要因（例えば、友人との関係、教師との関係、学業の成績など）を研究者側がはじめから設定しているため、当該の学校環境がどのような特徴を持っているのか、何が重視されているのかは考慮されていない（岡田, 2005；大久保・青柳, 2003）。つまり、従来の学校への適応感研究では、友人関係や教師との関係や学業の成績はどの学校においても等しく価値が置かれ、学校適応に対して正の影響を及ぼしているという暗黙の仮説をもって研究されてきたと言える。したがって、友人との関係も良く、教師との関係

も良く、学業にも積極的に取り組む青少年が最も学校環境に適応していると考えられてきたのである。しかし、こうした要因の欠如は、青少年が実際に学校への適応の問題を抱えていることとは異なっていると考えられる。実際に、近年になり、教師との関係が悪くても学校への適応の問題を抱えていない青少年も存在しているし、学業に積極的に取り組まなくても学校への適応の問題を抱えていない青少年も存在していることが指摘されてきた（大久保, 2005）。つまり、これまでの先行研究において用いられてきた適応感尺度による測定では、現代の青少年が学校への適応の問題を抱えていることと必ずしも合致しない可能性が考えられる。

以上のことから、学校への適応感の要因であると考えられてきた「友人との関係」、「教師との関係」、「学業」などは、学校への適応感そのものというより、学校への適応感に影響を与える重要な要因という意味で適応感を規定する学校生活の要因として捉え直せる（岡田, 2005；大久保・青柳, 2003）と言えるだろう。現実に、個々の学校によって重要視される学校生活の要因は異なっているものと考えられるため、学校生活の要因が学校への適応感に与える影響は学校によって異なっていると考えられる。例えば、学業に高い価値が置かれていない学校では、学業への積極的な取り組みは必ずしも学校への適応感に結びつかないと考えられる。同じように、教師との関係に価値が置かれていない反教師的な文化が存在するような学校では、教師との良い関係は必ずしも学校への適応感に結びつかないと考えられる。

本研究では大学生を対象として、学校適応感の予測因子について検討することを目的とした。学校適応感を取りあげて検討した石本（2010）の研究では、女子にとっての友人関係は同年代の男子よりも学校適応感に与える影響が大きいことが指摘されている。そこで、調査対象者を女子のみとし、学校適応にはどのような友人関係を築くことが望ましいのかについて検討した。大久保（2005）によると、学校適応感の規定要因については多くの研究がされているが、各学校によって学校適応の規定要因が異なることが指摘されている。このことからも、女子大学において調査を行う意義があると考えられる。

そのさい本研究では、大学生活に対する様々な主観的な意味づけを考慮し、個人が環境と適合している時の認知や感情を測定する「大学生用適応尺度」（大久保・

青柳, 2003）を用いて検討することとした。この尺度は、「周囲に溶け込んでいる」や「周りの人と楽しい時間を共有している」など、周囲に溶け込め、馴染めていることから生じる気軽さや快適さ、居心地の良さを表す項目からなる第１因子「居心地の良さの感覚」、「他人から頼られていると感じる」や「必要とされていると感じる」などの信頼感や受容感を表す項目からなる第２因子「被信頼感・受容感」、「熱中できるものがある」や「好きなことができる」など、課題や目的があることによる充実感を表す項目からなる第３因子「課題・目的の存在」、「その状況で嫌われていると感じる（逆転項目）」や「無視されていると感じる（逆転項目）」など他者からの拒絶感や周囲との劣等感を表す項目からなる第４因子「拒絶感の無さ」から構成されている。本研究では、「大学生用学校適応感尺度」（大久保・青柳, 2003）を用い、居場所感（本来感、自己有用感）、自尊感情、自己肯定感という自己概念と友人関係の特徴が学校適応感に及ぼす影響について検討していく。

まず、学校適応感に関連する１つ目の要因として「居場所感」を取りあげた。1980 年代頃より、自分が所属する環境に適応するためには「居場所」が必要であると主張する研究が増えてきており、文部省も 1992 年に学校適応対策調査研究協力者会議が学校内での「心の居場所づくり」の必要性を指摘している（文部省, 1992）。また、不登校対応においても、居場所として子どもをありのまま受け入れることの重要性が指摘されており（朝日新聞, 2004; 2003）、教育現場においても、「居場所」と不登校や引きこもりとの関連が注目されている（芹沢, 2000）。なお過去には、避難場所という意味で使われていた「居場所」が、最近では自己回復の場、自己安定化の場という意味での使用が多くなっている（住田・南, 2003）。心理臨床の現場においても、カウンセリングそのものを、クライエントの日常生活の一部としてクライエントを側面で抱える「居場所」であると捉え、どのような現場であっても「居場所」の役割が重要であると指摘されているようになってきている（廣井, 2000）。

また、自分が実際に人の役に立っているといった充実感を得られる居場所や、自分が相手にありのままに受け入れられていると感じる居場所があることが、適応に結びついていることを支持した先行研究が多くみられることが指摘されている（杉本・庄司, 2006）。例えば則定（2008）は「安心感」、「被受容感」、「本来感」、

「役割感」の４側面を居場所感の下位尺度として用い、母親、父親、親友それぞれに対する居場所感を測定しているが、居場所感の定義が定められてはおらず、適応との関連についての検討は行っていない。本研究では、「居場所」を「環境における文脈からの要請と調和した形で、自己の欲求を充足できる場である」と位置づけるとともに、「居場所感」を「主観的な居場所の知覚」と定義し、学校適応感との関連を検討する。そのさい、「ありのままでいられる」など、自分が相手にありのままに受け入れられていると感じる感覚の「本来感」、自分が相手の役に立っているかどうかという「役に立っていると思える」自己有用感から構成される居場所感尺度（石本, 2005）を用いることとした。

次に、学校適応感の規定要因として、友人関係のあり方に着目した。先行研究において、学校における友人との関係が学校適応に大きな影響を有することが指摘されている（大久保・長沼・青柳, 2003；古市, 1991；古市・玉木, 1994；岡田, 2007；石本・久川・斎藤・上長・則定・日潟・森口, 2009）。青年期の友人関係は、発達とともに活動や物を共有する児童期とは異なり、内的体験の共有などによる親密性を中心としたより内面的な友人関係に変化するといわれている（Damon, 1983）。例えば中学生の友人関係の特徴である友人との強い同調性を有する関係は、発達過程における一過程であり、必ずしも否定的な意味を持つわけではない。また、中学生においても内面的な互いの類似性の確認による一体感（凝集性）を持つことが精神的健康や学校適応感、安心感を高めることが明らかにされている（長尾, 1997；須藤, 2003；田中・吉井, 2005）。

岡田（1995）は、希薄化されている友人関係を表面的で快活な関係を求める傾向の「群れ関係群」、内面的関係を避ける傾向の「関係回避群」、相手に気を遣う傾向の「気遣い関係群」の３つの特徴として分類した。そして、「群れ関係群」の特徴を、深く内面的な関わりは行わず明るく楽しくノリの合うような関係を積極的に求めること、また自分と似た他者と自分とを自らを動かす力という感覚的な側面で同一視することで安定感を得る、と指摘している。相手との同一性を保っている限りは自己が安定しているが、他者との異質性や自分の個別性を認識すると自分が崩れてしまうような不安定性を有していることが推察される（松下・吉田, 2007）。「関係回避群」の特徴は、躁的防衛が低く、相手との深い関わりを拒否する傾向が高いなど、対人関係から退却する面が一貫してみられる。他者と

の付き合いから不安や恐怖を感じることを恐れることから、他者と関わることそのものを避ける傾向にあると言える（岡田, 1993, 1995, 1999）。「気遣い関係群」の特徴は、躁的防衛が強く（岡田, 1993）、互いに傷付けないように気を遣い合う傾向にあると考えられる。他者に対して内省的に付き合うことができ、友人との深い付き合いも可能であるとしている（岡田, 1995）。本研究では、現代青年の友人関係の特徴が学校適応とどのような関係性にあるのかについて検討することも目的とした。

さらに３つ目の規定要因として「自尊感情」を取りあげ、学校適応感との関連を検討した。「自尊感情」とは、自己に対する評価感情であり、自分自身を基本的に価値のあるものとする感覚であり、人の言動や意識・態度を基本的に方向づけるもの、として定義されている（心理学辞典, 1999）。自分自身の存在や生を基本に価値あるものとして評価し信頼することによって、人は積極的・意欲的に経験を積み重ね、満足感を持ち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうる。そのため「自尊感情」は、精神的健康や適応の基盤をなす（心理学辞典, 1999）とされており、また例えば長谷川（2009）は、自尊感情が高いほど不安や抑うつが低く、人生における満足度が高く、積極的に他者関係を構築し、人格的な成長を示すと主張している。

しかしその一方で、自尊感情が自己形成や適応を促進させるどころか、個人の適応に対してほとんど影響を与えることなく、逆に社会適応を阻害する可能性すらあることも実証的な観点から報告されている（Baumeister, Campbell, Krueger & Vohs, 2003; Crocker & Park, 2004）。例えば Heatherton & Vohs（2000）は、自尊感情が高い人が課題に失敗したとき、他者に対して敵意的な行動をとり、他者から嫌われることを指摘している。この指摘と一貫する代表的な知見として、自尊感情の高さが不適応を引き起こすことを示したいくつかの実証的な研究（e.g., Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993）もみられる。最近では、教育実践についての哲学的な論考においても、自尊感情の育成に関して慎重的な見解が示されている（Cigman, 2004）。以上のことから、本研究では、自尊感情と友人関係の特徴（「群れ」「関係回避」「気遣い」）との関連を検討するとともに、自尊感情が学校適応感に及ぼす影響についても検討していきたい。

さらに、４つ目の規定要因として「自己肯定感」を取りあげた。自己肯定感と

は、自分の中の長所として認識している部分のみならず、短所とも向き合い、その上でありのままの自己を客観的に認知して肯定的に見ようとする感覚である（伊藤, 1992）。この自己肯定感は、自分を認めてくれる人がいるという感覚や、自分はやればできるという感覚、自分が所属する集団との一体感などと密接に関連していると指摘されており、学校環境における友人や教師などの周囲とのかかわりの中ではぐくまれるものとされている。そのため、自己肯定感が高いことは、学校適応感に対してポジティブな影響を及ぼすことが考えられる。

逆に、自己肯定感が低いと、失敗を恐れて多くのことに消極的になり、自分を否定して孤立したりすることが懸念されている（斎藤・小野・社浦・守谷, 2008）。そのため近年、青少年の自己肯定感を高める指導が重要であると指摘されている。例えば、日本で有数の子供支援を行うとともにそのための支援機関を備えている川崎市が、市内の子どもたちを対象として 2005 年から 2008 年に行った調査では、自己肯定感の低下がみられ、自己肯定感の低い子どもは自己肯定感の高い子どもと比較して自分の気持ちや意見を表明することなく我慢する傾向にあり、その傾向がいじめと関係し、不登校生徒数の増加に繋がっている可能性を指摘している（川崎市子どもの権利委員会, 2008）。また、中学生、高校生、大学生の自己肯定感について調査した平石（1990）おいても、中高生だけでなく、大学生の学校適応感にも自己肯定感が影響を与えていることが明らかにされている。

方法

調査対象者：首都圏の私立女子大学に在籍する女子大学生 134 名を対象として質問紙調査（自記式集合調査法）を行った。収集されたデータのうち、1 ヶ所でも欠損値のある対象者 11 名を除いた 123 名を分析対象とした。

調査時期：2011 年 7 月

調査方法：質問紙調査法を採用した。質問紙の構成は、①学校適応感（居心地の良さの感覚、被信頼・受容感、課題・目的の存在、拒絶感の無さ）、②居場所感（本来感、自己有用感）、③自尊感情、④自己肯定感、⑤友人関係（気遣い、関係回避、群れ）、フェイス・シートからなる。

大学環境への適応感尺度（大久保・青柳, 2003）：学校適応感を測定する尺度と

して、大久保・青柳（2003）によって作成された「大学生用適応感尺度」（大学生が大学環境に対してどのような認知をしているか、またどのような感情を抱いているかを測定する）を用いた。本尺度は「居心地の良さの感覚」（10 項目）、「被信頼・受容感」（6 項目）、「課題・目的の存在」（7 項目）、「拒絶感の無さ」（6 項目）の 4 下位次元で構成され、計 29 項目からなる。これら各項目について、現在の大学環境での自分について「全くあてはまらない（1 点）」から「非常にあてはまる（5 点）」までの 5 件法で回答を求めた。

居場所感尺度（石本, 2010）：個人が自分らしく「ありのままでいられる」ことを測定する尺度として本来感尺度（伊藤・小玉, 2005）（6 項目）と、「役に立っていると思える」ことを測定する項目として自己有用感尺度（石本, 2005）（7 項目）の計 13 項目からなる「居場所感尺度」（石本, 2010）を使用した。先行研究（石本, 2005；中村, 1999；小畑・伊藤, 2001；白井, 1998）では、大学生の居場所となりうる対人関係として家族関係、友人関係、恋人関係における居場所感を測定しているものが多い。しかし石本（2010）は、大学生は親離れし、家族より友人関係や恋人関係を重視することを指摘しており、高橋・米川（2008）も、大学生は家族という安全空間から徐々に自立していくこと、なかでも女子は友人関係が心理的適応に大きく影響することを指摘している。そのため、本研究では女子大学での学校適応感を対象とした研究であることから、友人関係における居場所感のみを測定した。質問に対して、友人と一緒にいるときの自分がどの程度当てはまるかを「あてはまらない（1 点）」から「あてはまる（5 点）」までの 5 件法で回答を求めた。

友人関係尺度（岡田, 1995）：現代の青年の特徴として、付き合うことを極端に恐れ、関係を希薄化させる傾向が指摘されている（栗原, 1989 など）ことから、青年期の友人関係の希薄さの特徴に注目した岡田（1995）の友人関係尺度を用いた。この尺度は、“相手の考えていることに気を遣う”など、友人に気を遣いながら関係をもつ「気遣い」尺度 6 項目、“お互いのプライバシーには入らない”など、友人との間に距離を作り、深く関係を持たないように関係をもつ「関係回避」尺度（6 項目）、“みんなで一緒にいることが多い”などの友人と集団で行動を共にするような関係をもつ「群れ」尺度（5 項目）の計 17 項目から構成される。「全くあてはまらない（1 点）」から「非常にあてはまる（4 点）」までの 4 件法

で回答を求めた。

自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）：Rosenberg（1965）は自己への尊重や自己の価値を評価する程度のことを自尊感情と捉え、自分自身に対する肯定的感情の程度を測定する尺度（10 項目）を作成した。本研究では、ローゼンバーグの自尊感情尺度を邦訳した日本語版尺度（山本・松井・山成, 1982）を用いて、「あてはまらない（１点）」から「あてはまる（５点）」までの５件法で回答を求めた。

自己肯定感尺度（平石, 1990）：自分が環境に適応していて、自分自身の存在が重要であり、自身を受け入れられているかといった自己肯定感を測定する尺度（平石, 1990）11 項目を用いた。「あてはまらない（１点）」から「あてはまる（５点）」までの５件法で回答を求めた。

結果

各尺度項目における内的一貫性の検討

大学環境への適応感尺度：大学生用学校適応感尺度を構成する全 29 項目において適応感の下位次元ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、「居心地の良さの感覚」では α =.93、「被信頼・受容感」では α =.89、「課題・目的の存在」では α =.79、「拒絶感の無さ」では α =.84 であった。このことから、内的一貫性は十分に認められることが示された。

居場所感尺度：居場所感尺度を構成する全 13 項目において、自己有用感および本来感の次元ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、「自己有用感」では α =.89、「本来感」では α =.82 であった。よって、内的一貫性は十分に認められることが示された。

友人関係尺度：友人関係尺度を構成する気遣い、関係回避、群れそれぞれの下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、「気遣い」では α =.54、「関係回避」では α =.56、「群れ」では α =.68 であった。本研究の結果からは α 係数が十分に高かったとは言えないものの、岡田（1995）においては内的一貫性が十二分に高いことが確認されている尺度であることと、広く利用されている尺度であることを鑑み、本研究においては、原尺度と同じ尺度構成のまま分析に用いることとした。

自尊感情尺度：自尊感情尺度を構成する全 10 項目のクロンバックの α 係数を

算出したところ α =.86 であった。このことから、内的一貫性は十分に認められることが示された。

自己肯定感尺度：自己肯定感尺度を構成する全 11 項目のクロンバックの α 係数を算出したところ α =.85 であったため、内的一貫性は十分に認められることが示された。

各尺度概念間の相関分析

はじめに、各尺度概念間の相関分析を行った（Table 1）。以下、特徴的な知見について取りあげる。

相関分析の結果、「関係回避」は、学校適応感の下位次元である「居心地の良さの感覚」（r=−.45, p<.01）と「被信頼・受容感」（r=−.39, p<.01）との間に有意な負の相関関係を有した。また「群れ」は、学校適応感の下位次元である「居心地の良さの感覚」（r=.42, p<.01）、「被信頼・受容感」（r=.32, p<.01）、「拒絶感の無さ」（r=.31, p<.01）との間に有意な正の相関関係を有していた。友人関係の下位尺度である「関係回避」と「群れ」は相反する方向性を有する概念であり（r=−.35, p<.01）、「関係回避」と「群れ」とが、学校適応感の下位尺度との間の相関関係において、正負の符号が反対となる相関関係を示したことは容易に了解しうる結果であろう。ここで注目したいこととして、それとは対照的に、友人関係の内的関係を望む「気遣い」は、「群れ」以外のいずれの変数とも有意な相関関係を有していなかったことが挙げられる。また「自尊感情」は、学校適応感の下位次元である「居心地の良さの感覚」（r=.33, p<.01）、「被信頼・受容感」（r=.39, p<.01）、「課題・目的の存在」（r=.54, p<.01）、「拒絶感の無さ」（r=.39, p<.01）のすべての下位次元との間に有意な正の相関関係を有していた。

自己概念、友人関係の特徴が学校適応感に及ぼす影響：共分散構造モデル

自己概念（自尊感情、本来感、自己有用感、自己肯定感）および友人関係の特徴（関係回避、気遣い、群れ）の各変数が、大学生の学校適応感の各側面（居心地の良さの感覚、被信頼・受容感、課題・目的の存在、拒絶感の無さ）に及ぼす影響について検証するために、共分散構造分析を用いたパス解析を行った。友人関係の規定要因として、自尊感情、本来感、自己有用感、自己肯定感を設定した。また、これらの各変数と学校適応感の側面との間の直接的な影響についても検討するために、１）自己概念４変数から学校適応感４変数へのパス、２）友人関係

Table 1 各尺度概念間の相関分析結果

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
(1) 気遣い	(.54)	-.21*	.24**	-.17	-.03	.08	-.05	.06	.08	-.07	-.13
(2) 関係回避		(.56)	-.35*	.06	-.16	-.38**	-.11	-.45**	-.39**	-.12	-.07
(3) 群れ			(.68)	-.04	.22*	.30**	.25**	.42**	.32**	.05	.31**
(4) 自尊感情				(.86)	.51**	.41**	.46**	.33**	.39**	.39**	.54**
(5) 自己肯定感					(.85)	.51**	.60**	.36**	.46**	.65**	.35**
(6) 自己有用感						(.89)	.39**	.54**	.72**	.29**	.39**
(7) 本来感							(.82)	.46**	.43**	.53**	.53**
(8) 居心地の良さの感覚								(.93)	.69**	.41**	.46**
(9) 被信頼・受容感									(.89)	.45**	.38**
(10) 課題・目的の存在										(.79)	.37**
(11) 拒絶感の無さ											(.84)

* 相関係数は5%水準で有意（両側），** 相関係数は1%水準で有意（両側）。
（　）内は信頼性係数（Cronbach の α 係数）を示す。

の特徴３変数から学校適応感４変数へのパスをすべて想定した分析を行った。その後、有意ではなかったパスを除いて再度分析を行った。その結果、Fig.1 に示す通りとなり、モデルの適合度指標はおおむね十分な値が示された（*GFI*=.962, *AGFI*=.841, *CFI*=.960, *RMSEA*=.079; なお Fig.1 において誤差変数ならびに誤差変数間の相関関係は省略した）。

自己概念変数として取りあげた「自尊感情」、「本来感」、「自己有用感」、「自己肯定感」の４変数間の相関関係はすべて有意な正の相関関係が示された。まず、これら自己概念４変数と友人関係の特徴３変数（「関係回避」、「気遣い」、「群れ」）との関係についてみていく。「自尊感情」が高いことは、友人関係における「関係回避」が高いこと（*path coefficient*=.26, p<.01）、「群れ」が低いこと（*path coefficient*=−.25, p<.05）にそれぞれ影響を及ぼしていた。「本来感」と「自己有用感」が高いことは、ともに友人関係において「群れ」が高いことに影響を及ぼしており（それぞれ *path coefficient*=.26, p<.01, *path coefficient*=.29, p<.01）、一方で「自己有用感」が高いことは「関係回避」が低いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=−.48, p<.01）。「自己肯定感」は友人関係のいずれの特徴に対しても有意な関係を示さなかった。

次に、自己概念および友人関係の特徴が、大学生の学校適応感の各側面に及ぼす影響について見ていくこととする。「居心地の良さの感覚」に対する直接パスを見ると、「本来感」、「自己有用感」が高いほど「居心地の良さの感覚」が高いことが示された（それぞれ *path coefficient*=.16, p<.05, *path coefficient*=.35, p<.01）。また、友人関係として「関係回避」が高いほど「居心地の良さの感覚」が低く（*path coefficient*=−.24, p<.01）、「群れ」が高いほど「居心地の良さの感覚」が高いことが示された（*path coefficient*=.18, p<.01）。「被信頼・受容感」に対する直接パスを見ると、「自己有用感」が高いほど「被信頼・受容感」が高いことが示された（*path coefficient*=.68, p<.01）。また、友人関係において「関係回避」が高いことは、「被信頼・受容感」が低いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=−.13, p<.05）。「課題・目的の存在」に対しては、「自己肯定感」のみが関連を示し、「自己肯定感」が高いことが「課題・目的の存在」の高いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=.63, p<.01）。「拒絶感の無さ」への直接パスを見ると、「自尊感情」、「本来感」がともに高いほど「拒絶感の無さ」が高いことが示された（それぞれ

path coefficient=.42, p<.01, *path coefficient*=.27, p<.01）。また、友人関係において「群れ」が高いことは「拒絶感の無さ」が高いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=.25, p<.01）。なお、友人関係の３つの特徴のうち、「気遣い」に対して、本研究で取りあげた自己概念変数はいずれも「気遣い」との間に影響関係を有さず、また「気遣い」は学校適応感のどの側面に対しても有意な関連を示さなかった。

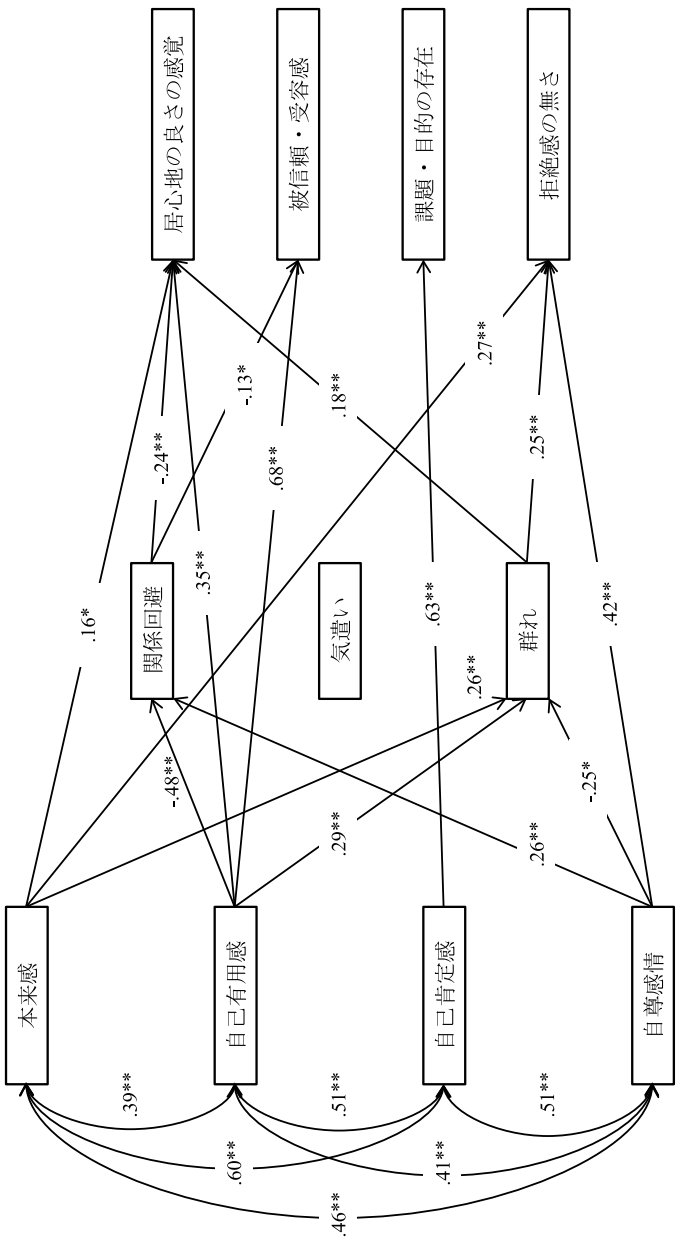
続いて、自尊感情、本来感、自己有用感、自己肯定感、および友人関係の特徴（関係回避、気遣い、群れ）の関係性が、大学生の学校適応感の各側面に及ぼす影響について詳しく論じていく。

１）「居心地の良さの感覚」に対する影響関係

「自尊感情」と「自己有用感」はともに、「関係回避」と「群れ」それぞれを介して「居心地の良さの感覚」に影響を及ぼすとともに、「自己有用感」は直接的にも「居心地の良さの感覚」に対して影響を及ぼすことが示された。前述したように、「自尊感情」と「自己有用感」は有意な正の相関関係を有しているにもかかわらず、「関係回避」、「群れ」に対して相反する方向の影響関係を有していた。具体的は、「自尊感情」が高いことは「関係回避」を高める一方で（*path coefficient* =.26, p<.01）、「自己有用感」が高いことは「関係回避」を低減させていた（*path coefficient*=−.48, p<.01）。また、「自尊感情」が高いことは「群れ」を低減させる一方（*path coefficient*=−.25, p<.05）、「自己有用感」が高いことは「群れ」を高めていた（*path coefficient*=.29, *ps*<.01）。

さらに、「関係回避」の高さは「居心地の良さの感覚」の低いこと（*path coefficient* =−.24, p<.01）、「群れ」の高さは「居心地の良さの感覚」の高いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=.18, p<.01）。「自己有用感」は「居心地の良さの感覚」に対する直接効果（*path coefficient*=.35, p<.01）と、「関係回避」、「群れ」それぞれを介して「居心地の良さの感覚」に及ぼす間接効果（それぞれ −0.48 × −.24= 0.1152, 0.29 × 0.18=0.0522）の影響関係を有していた。

また、「本来感」は直接的に「居心地の良さの感覚」の高さに影響を及ぼすとともに（*path coefficient*=.16, p<.05）、「群れ」を介しても「居心地の良さの感覚」に対して影響を及ぼしており（0.26 × 0.18=0.0468）、「本来感」が高いことは「群れ」が高いこと、さらには「居心地の良さの感覚」が高いことに影響を及ぼして



GFI=.962, *AGFI*=.841, *CFI*=.960, *RMSEA*=.079

Fig. 1　学校適応感におけるパス解析結果（共分散構造分析による）

いることが認められた。

2）「被信頼・受容感」に対する影響関係

「自尊感情」と「自己肯定感」はともに「関係回避」を介して、「被信頼・受容感」に対して影響を及ぼすことが示された。「自尊感情」が高いことは「関係回避」を高めていた一方で（*path coefficient*=.26, p<.01）、「自己有用感」が高いことは「関係回避」を低減させており（*path coefficient*=−.48, p<.01）、友人関係において「関係回避」が高いことは、「被信頼・受容感」が低いことに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=−.13, p<.05）。また、「自己有用感」は「被信頼・受容感」の高さに対して直接的にも影響を及ぼすとともに（*path coefficient*=.68, p<.01）、「関係回避」を介した間接効果（−0.48 × −0.13=.0624）も有していた。

3）「課題・目的の存在」に対する影響関係

「課題・目的の存在」に対し、有意な関係を有していたのは、「自己肯定感」の直接効果のみであり、「自己肯定感」が高いことは直接的に「課題・目的の存在」の高さに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=.63, p<.01）。

4）「拒絶感の無さ」に対する影響関係

「自尊感情」、「本来感」、「自己有用感」はそれぞれ「群れ」を介して「拒絶感の無さ」に対して影響を及ぼしていた。「本来感」と「自己有用感」が高いことはともに「群れ」を高める一方で（それぞれ *path coefficient*=.26, p<.01, *path coefficient* =.29, p<.01）、「自尊感情」が高いことは「群れ」を低減させており（*path coefficient* =−.25, p<.05）、友人関係において「群れ」が高いことは、「拒絶感の無さ」の高さに影響を及ぼしていた（*path coefficient*=.25, p<.01）。また、「自尊感情」、「本来感」のいずれも、「群れ」を介した間接効果（それぞれ −0.25 × 0.25=− 0.0625, 0.26 × 0.25= 0.065）と、「拒絶感の無さ」に対する直接効果（それぞれ *path coefficient* =.42, p<.01, *path coefficient*=.27, p<.01）の両方の影響関係を有していた。

考察

本研究では、青年期後期に位置すると考えられる女子大学生において、自己概念ならびに友人関係のあり方が学校適応感にどのような影響を及ぼすのかという問題意識から、主観的な学校適応感に対する関係を検討するための質問紙調査を行った。

まず、学校適応感とその規定要因として取り上げた変数間の相関関係を検討した結果、学校適応感の下位次元と、自尊感情、居場所感（自己有用感、本来感）、自己肯定感との間に有意な正の相関関係が示された。大学生にとって、自尊感情や居場所感、自己肯定感が高いことは学校適応感と正の相関関係にあることが容易に想定される。中でも、自己有用感と本来感は他の変数と比較して、学校適応感との間に明確な正の有意な相関関係にあることが見てとれる。このことは、物理的居場所だけでなく、心理的居場所が学校内にあることが学校適応感と関連しており、先行研究で示されてきた知見と一貫する結果である。また、友人関係の特徴のうち、気遣いは学校適応感との間に有意な相関関係を有していなかった。その一方で、群れは居場所感（自己有用感、本来感）との間に有意な正の相関関係を有していたとともに、学校適応感の下位次元である居心地の良さの感覚と被信頼・受容感との間にも有意な正の相関関係を有していた。パス解析結果においても、気遣いは学校適応感のいずれの下位次元に対しても影響を及ぼしていなかった。このことから、友人と内的な深い付き合いをすることが学校適応感を高めるとは言えず、深い友人関係を望んでいたと考えられる過去の時代の青年像とは違った表面的な付き合いが大学生において適切である側面が示されたと考えられる。

さらに、パス解析の結果、自己有用感は、学校適応感の下位次元のうち、居心地の良さの感覚、被信頼･受容感に対して、また本来感は、居心地の良さの感覚、拒絶感の無さに対して影響を及ぼしていた。本来感が高いことは、友人関係において群れる特徴が高く、居心地の良さの感覚および拒絶感の無さが高いことに影響を及ぼしていた。したがって学校適応には、相手の前で「ありのままでいられること」ができ、「役に立っていると思える」心理的居場所が必要であると考えられる。また本研究で得られた結果から、大学生に必要とされる居場所として、学校適応感の下位次元である「居心地の良さの感覚」と「拒絶感の無さ」とがともに有意な関連を有していた友人関係の「群れ」という側面が重要な役割を果たしていることが示された。友人関係については、これまで中学生、高校生それぞれの発達段階ごとに適切とされる友人関係の違いが論じられてきており、中学生ではグループや集団を志向する「群れ関係」が、また高校生では集団的な付き合いを避ける「関係回避」が適切とされてきた。それに対して、本研究では大学生

が学校適応するためには、「群れ関係」が促進的な役割を有していることが示された。

青年期は友人関係の重要性が高まる時期である。深く内面的な関わりは行わないものの、明るく楽しくノリの合うような関係を積極的に求めており、集団の中で居場所を作りグループになることで、学校環境に適応していると考えられる。学校環境において自分の居場所としてグループを持つことが、表面的な付き合いであったとしても、環境適応に寄与していると言える。ここで注目すべき点として、友人関係の特徴のうち、気遣いが適応感のいずれの側面に対しても影響を及ぼしていなかったことから、現代の青年においては、相手と深い関係を持つ内的関係が環境への適応とは明確な関係性を有していないと言える点が指摘できるだろう。そのため、お互いに距離を置き、表面的な関係を築くことで、個々人が環境に適応できるように対応をしていることが考えられる。近年の女子大学生の友人関係においては、過去において一般的だとされてきたような青年期の友人関係のあり方が適応的とは言えないことが示された。

一方、本研究結果から、友人との間で関係回避を行うことは、学校内での居心地を悪くさせ、他者から自分が必要とされているという感覚を低下させることが示された。これまで、希薄な友人関係が学校適応に与える影響について実証的には必ずしも十分に検討されてはこなかったが、本研究の結果からは、友人との間で関係回避を行うことは、被信頼・受容感や居心地の良さに対して負の影響を及ぼしており、学校適応にとって望ましくないことが明らかになった。

本研究の制約と今後の課題：本研究において、調査対象者が私立女子大学の学生であったため、女子による特徴が大きくあらわれたと言えるだろう。そのため、今後は女子とは異なる友人関係上の特徴を持つ男子大学生について、学校適応感の規定要因を検討することが必要であろう。また多様な大学の学生からデータを収集し、学校種別ごとの特徴をとらえ、当該の学校において何が重視され何に価値が置かれているのかを考慮することが、今後、重要であるだろう。そのことによって、個々の学校種別ごとに、学校適応感に関わる要因を整理し比較することで、学校適応感に関わる要因の一般化を行うことが可能になると考えられる。多くの先行研究で、学校適応感に及ぼす広義の友人関係の影響について研究結果が蓄積されてきており、本研究においても、友人関係のあり方が学校適応感に大き

な影響を及ぼしていることが明らかとなった。本研究では、希薄化したと指摘される現代的な友人関係の特徴に着目して調査研究を行ったが、今回とは別の友人関係の特徴（密着や切り替えなど）に注目して検討することも有用だろう。

また近年、AO 入試や各種の推薦入試など多くの入試形態での選抜が行われるようになったが、AO 入試や推薦入試によって入学した者と、一般選抜入試（一般入試）で入学した者との間での大きな学力差や、大学生全体の学力低下が問題視されるようになってきている。しかし、入試形態の違いや不本意入学（入学した大学が志望していた大学ではない）といった入学者選抜に関わる要因が入学後の適応や満足感に及ぼす影響についての実証研究は数少ない（庄司, 2011）。大学または短期大学への進学率が 50％を超えてきている（文部科学省, 2007）今日、進学を希望する者ほとんどが、進学できる時代となってきている。だからといって、全ての学生が希望した大学に進学できるわけではなく、入りたい学校に入学できない不本意入学者も数多く存在している。大学中退者数も増加傾向にある中、学力が極めて低い入学者や不本意入学者がいかなる心理状態をいだいていることが、充実した学生生活を送ることに繋がるのかを検討する必要があると考えられる。

今後は、入試形態や不本意入学か否かという要因についても検討を行い、現時点での大学生活における適応感に対してどのような影響を及ぼしているのかについて検討することが望まれる。中学、高校に比べ、学外においても人との交流が多く行われる大学生活では、人との関係や居場所感は様々な要因から影響を受けるものと考えられる。先行研究において、多くの新入生が 4 月の時点では大学生活に自然に慣れている（庄司, 2011）という指摘がなされていることから、特に 5 月以降の時点において不適応を感じている者への対応が学生支援として重要であると言えるだろう。そのため、そのような学生について教職員や学内の友人との関係が学校適応とどのような関係にあるのかを明らかにし、大学環境へ適応するために何をサポート源としているのかを検討していくことが求められよう。そして、このことを通じて適応感を感じることができないでいる大学生が大学生活への適応感を向上させるためにはどのようなサポートが効果的であるのかについて検討していくことが重要であると考えられる。

要約

本研究の目的は、主観的な適応感の予測因子となる変数として、「自尊感情」、「本来感」「自己有用感」（本来感と自己有用感が“居場所感”概念の２側面である）、「自己肯定感」の４つの自己概念と、現代青年の友人関係の３側面（「関係回避」「気遣い」「群れ」）（岡田, 1995 による）を取り上げ、女子大学で学ぶ大学生の学校適応感に対する影響関係について検討することであった。

調査は、日本国内の私立女子大学（首都圏）に在籍する 134 名（全員女性）に対して自記式調査を行った。共分散構造分析法を用いたパス解析（分析には Amos 19. 0J（Arbuckle, 2010）を使用）の結果、「大学生用適応感尺度」を構成する４つの下位次元（「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題目的の存在」「拒絶感の無さ」）に対して、次のような関係性が見出された。

具体的には、「居心地の良さの感覚」は、「本来感」「自己有用感」が高いこと、また「関係回避」が低く「群れ」が高いことによって予測された。「被信頼・受容感」は、「自己有用感」が高いこと、また「関係回避」が低いことによって予測された。「課題・目的の存在」は、「自己肯定感」が高いことによってのみ予測された。「拒絶感の無さ」は、「自尊感情」「本来感」が高いことと、「群れ」が高いことによって予測された。

大学への主観的な適応感はその下位次元ごとに予測因子による影響関係が異なっていることが見出されたことから、大学教育現場において、この知見を考慮した教育上の対応が必要とされるだろう。また、近年では学業を第一と捉えない大学生が増えている現状を考慮し、それぞれの大学の特質に応じた学校適応感を実証的に把握し、対応を行っていくことの重要性が指摘された。

註

１）本研究は第１著者（潮村）と第３著者（船越）の指導の下で行われた、第２著者（冨岡）による平成 23 年度卒業課題研究をもとに、加筆・修正を行ったものである。

引用文献

Arbuckle, J. L. 2010 *IBM SPSS Amos 19 User's Guide*. Crawfordville, FL.: Amos Development Corporation.（井上哲浩（日本語訳監修）（2010）Amos 19J ユーザーズガイド IBM SPSS Japan, Inc.）

朝日新聞 2004 自分嫌い：劣等感 , 居場所がない（10 代の入り口で：中）7 月 16 日朝刊

朝日新聞 2003 不登校 3：居心地の良い場所必要（ゆらぐ教育）10 月 18 日朝刊

Baumeister, R.F., Campbell, J.D., Krueger, J.I., & Vohs, K.D. 2003 Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.

Baumeister, R.F., Heatherton, T.F., & Tice, D.M. 1993 When ego threats lead to self-esteem. *Journal of personality and Social Psychology*, 64, 141-156.

ベネッセコーポレーション 1997 第 5 回国際教育シンポジウム報告書「子どもにとっての教師」―国際比較を通して教師のあり方を考える― モノグラフ・小学生ナウ, 別冊

Cigman, R. 2004 Situated self-esteem, Journal of Philosophy of Education, 38, 1, 91-105.

Crocker, J., & Park, L. E. 2004 The costly pursue of self-esteem, *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.

Damon, W. 1983 *Social and personality development*. Norton.（山本多喜司（訳）1990 社会性と人格の発達心理学 北大路書房）

古市裕一 1991 小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.

古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研研究集録, 96, 105-113.

長谷川孝治 2009 自尊心、本来感、自己価値の随伴性が適応に及ぼす影響 日本社会心理学会第 50 回大会発表論文集, 532-533.

Heatherton, T. F. & Vohs, K. D. 2000 Interpersonal Evaluations Following Threats to Self：Role of Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 725-736.

平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究（I）―自己肯定性次元と自己安定性次元の検討― 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 37, 217-234.

廣井いずみ 2000 適応指導教室で居場所を見つけた中学生不登校女子の一事例 駒澤大学心理臨床研究, 6, 13-18.

石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 3, 278-286.

石本雄真 2005 心の居場所に関する理論的考察 日本青年心理学会第 13 回大会発表論文集, 66-67.

石本雄真・久川真帆・斎藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 2009 青年期女の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 第 20 巻, 2, 125-133.

伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.

伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想―現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.

川崎市子どもの権利委員会 2008 川崎市子どもの権利の視点にあたった条例を子どもの権利研究, 12, 6-11.

小泉令三 1995 小学校中学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44, 295-303.

栗原 彬 1989 優しさの存在証明：制度と若者のインターフェイス 新曜社

松下姫歌・吉田芙悠紀 2007 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 教育人間科学関連領域, 56, 161-169.

文部科学省 2007 平成 19 年度学校基本調査速報について 文部科学省生涯学習政策局調査企画課 2007 年 8 月〈http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/0001/07073002/001〉（2012 年 3

月 3 日アクセス）
文部省 1992 学校不適応対策調査研究協力者会議報告（概要）「登校拒否（不登校）問題について」―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して― 文部科学省中央教育審議会 1992 年 3 月 13 日〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001〉（2012 年 3 月 3 日アクセス）
長尾　博 1997 前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響：展望法と回顧法を用いて 教育心理学研究, 45, 203-212.
内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-146.
中村泰子 1999「居場所がある」と「居場所がない」との比較 大阪市立大学生活科学科 児童・家族相談所紀要, 18, 13-22.
則定百合子 2008 青年期における心理的居場所間の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科平成 19 年度博士論文（未公刊）
小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の「居場所」の研究―自由記述に表れた心の「居場所」の分類― 情報文化研究, 第 14 号, 59-73.
旺文社教育情報センター 2007 17 年度私立大中途退学状況 私立大の 17 年度中退者 5 万 5,500 人、中退率 2.9％！ 旺文社教育情報センター 2007 年 5 月 24 日〈http://eic.obunsha.co.jp/resource/topics/0705/0503.pdf〉（2012 年 3 月 3 日アクセス）
岡田　努 2007 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 2, 135-148.
岡田　努 2005 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集 移動科学・哲学篇, 25, 15-32.
岡田　努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, 9, 21-31.
岡田　努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
岡田　努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
大久保智生・青柳肇 2003 大学生用適応感尺度の作成の試み―個人―環境の適合性の視点から パーソナリティ研究　第 12 巻, 1, 38-39.
大久保智生・長沼君主・青柳肇 2003 学校環境における心理的欲求の充足と適応感の関連 ヒューマンサイエンスリサーチ, 12, 21-28.
Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press.
斎藤富由起・小野淳・社浦竜太・守谷賢二 2008 高校生における居場所感と自己肯定感及び無効化環境体験との関連性 千里金蘭大学紀要, 5 巻 , 69-81.
芹沢俊介 2000 居場所について 藤森　暁（編）現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ 3 現代人の居場所 至文堂
心理学辞典 1999 自尊感情 有斐閣 343-344.
白井利明 1998 学生は「居場所」をどうとらえているか 日本青年心理学会大会発表文集, 6, 34-35.
庄司正実 2011 心理系大学新入生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因 目白大学人間学部　目白大学心理学研究, 7, 15-27.
須藤春佳 2003 前青年期の「chumship 体験」に関する研究：自己感覚との関連を中心に 心理臨床学研究, 20, 546-556.
杉本希映・庄司一子 2006「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化 教育心理学研究, 54, 289-299.
杉村仁和子・石井秀宗・張　一平・渡部　洋 2007 児童生徒用ソーシャルスキル尺度開発研究報告書 東京大学大学院教育学研究科教育測定・カリキュラム開発（ベネッセコーポレーション）講座
住田正樹・南博文編 2003『子どもたちの「居場所」と対人政界の現在』 教育学研究 ,

70(3), 425-426.
鈴木伸一・戸ヶ崎恭子・坂野雄二 1998 女子大生の不適応に関する研究（2）―不適応状態測定尺度の作成― 日本健康心理学会第 11 回大会発表論文集, 100-101.
高橋晶子・米川 勉 2008 青年期における「居場所」の研究 福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学, 5, 57-66.
田中良仁・吉井健治 2005 チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, 23, 98-107.
戸ヶ崎泰子・秋山香登・嶋田洋徳・坂野雄二 1995 中学生の社会的スキルが友人関係と学校適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 557.
山田ゆかり 2006 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要 第 6 号, 29-36.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

The research on predictive factors for a subjective adjustment to a university: An examination from a perspective of university students' self-concepts and their friendship

Kimihiro SHIOMURA (Ferris University) Manami TOMIOKA (Tomioka Clinic of Internal Medicine) Risa FUNAKOSHI (Ferris University)

Abstract

The present research investigated the predictive factors for a subjective adjustment toward a university (college). In the hypothesis model, the predictive variables were four personality traits, and three sub-dimensions of friendship in modern adolescents. The four personality traits were 'self-esteem', 'sense of authenticity', 'sense of self-usefulness' and 'sense of self-affirmation'. The three sub-dimensions of friendship were 'avoiding intimate relationship', 'reserved attitude to friends' and 'gathering in crowds'. The criterion variables were sub-dimensions of subjective adjustment toward the university. The participants were 134 female studying in a women's university located in the metropolitan area of Japan. The data were submitted to the Structural Equation Model (using Amos). A subjective adjustment toward the university consists of four sub-dimensions; 'sense of comfort', 'feeling of acceptance and trust', 'existence of task and purpose' and 'absence of feelings of rejection'. The findings of the path analysis showed that the significant predictive factors are different depending on respective sub-dimension of the adjustment. The distinguishing findings are as follows; while low 'avoiding intimate relationship' predicted a high score in sub-dimensions of a subjective adjustment, high 'gathering in crowds' predicted a high score in sub-dimensions of a subjective adjustment. The importance for educational approach based on the findings shown above was discussed. Especially, in these modern days, some large portions of the students in higher educational institute do not value the academic achievement. It is important to seek respective predictive factors of students' subjective adjustment in each kind of educational institute.

Keywords: A Subjective Adjustment to a School, Self-Concept, Friendship